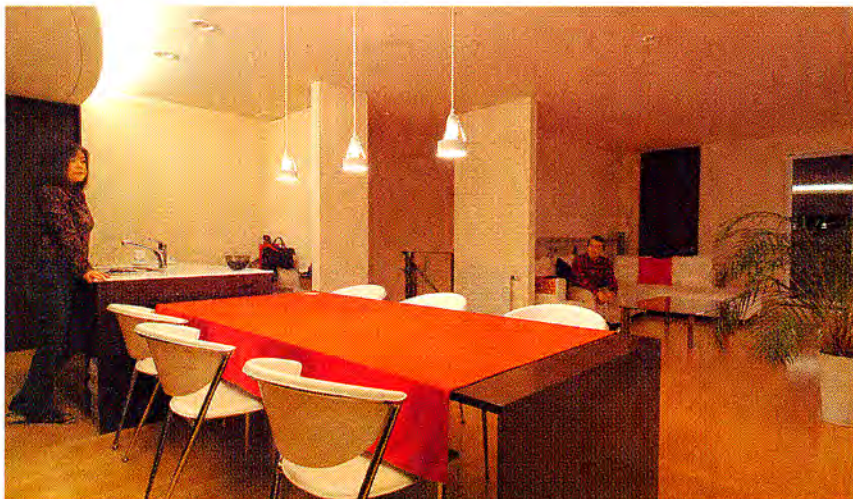


住まいのかたち

横並びや流行を追わず、人と二線を画した家に住む人が増えている。人は家に何を求めるのか。家のかたちを通し、家族のあり方やライフスタイルを探った。(6回連載します)

大きな窓、統一感のとれた家具、照明……。リビングとキッチンを合わせた部屋の広さは約三十畳にも上る。夜になると札幌の夜景が居ながらにして見られる。
札幌市南区、藻岩山のふもと。「私たちの思い描いたものがこの家だった」。家の持ち主、宮越健二さん(左)は目を細めた。そばで妻の美和子さん(右)も「夫婦二人の生活。部屋に間仕切りは要らない。この開放

息づかい デザイナーズハウス



広い空間が広がる宮越さんの自宅。統一感のとれたデザインが特徴
—札幌市南区



窓や階段の配置を工夫することで、明るい住宅となっている佐藤さん宅—同市東区

家族のぬくもり実感

感が良かった」と話す。道外勤務が多く、定年後のついのすみかとして宮越さんが行き着いたのは、「デザイナーズハウス」と呼ばれる住宅だった。ここ数年、若い世代からシニア世代にかけて、注目が集まり始めた。

ウズ(札幌)。一九九三年の会社設立以来、既製ではない創造にこだわってきた。デザイナーはその一方で、家具を含めたトータルな提案を行う。

藤本忠宏社長は「うちのモットーはシンプルモダン。ここ数年、デザイナーが求められるようになったのは、家が自己表現の手段に

を、分譲マンション並みの価格で販売している。秘密は土地の面積だ。同社の物件はほとんどが二十坪(約八十二平方メートル)前後。ここに三階建て4LDK(延べ床面積百三十一百四十平方メートル)の家を建築する。

築士は「建設地に行き、光と風の通り道を計算して設計する。吹き抜けで三階から一階まで光を通したり、窓を工夫することで一日中、部屋に柔らかな光を差し込ませる。デザイナーが土地の持っているポテンシャルを上げる」と語る。

なったから。住まいにブラアルファを求める人が増えている」とみる。

長は「関西では二十五坪の家は大豪邸。札幌の人はなぜ五十坪にこだわりの、郊外に住むのかと思った。郊外に住むより地下鉄駅沿線に住んだ方が利便性は高いし、家は将来、資産にもなる」と力を込める。

不動産アナリストの志田真郷さんは「居間を中心の間取りを決めるデザイン重視の家は核家族化・個室化の反動で、家族のきずなを取り戻そうとの動き」と分析。「悲惨な事件が起きた家の多くが子供が親に気づかれずに外出できる構造だった。その反省から居間に階段を設けるなどリビングを復権させようとの家が増えている」と指摘している。

デザイナーズハウスをサライーマンにも気軽に購入してもらおうと、建売で販売しているのがベストホーム(同)だ。札幌ドームの設計にも携わった畠中秀幸建築士の名前を前面に、地下鉄駅から徒歩圏の物件

(荻野貴生)